

<翻 訳>

叙事詩の宗教哲学 —Mokṣadharmā-parvan 和訳研究 (LXIV) ¹—

茂木 秀 淳 元信州大学教育学部

キーワード：ヴァス，ナーラーヤナの異名，ヴィユーハ，宇宙創造説

[324 章] (B.337 章, C.12818-12860, K.345 章) (Nārāyaṇa 章 (4) Vasu 王のエピソード)

ユディシュティラは言った。

(1) 偉大な王ヴァスは至尊者に帰依していた時²，どうして天から落ちて地の穴に入ったのですか。

ビーシュマは言った。

(2) ここでも人はこの古譚を語る。聖仙たちと三十柱の神々との対話を³，パーラタ族の者よ。

(3) 神々は「アジャによって祭るべし。アジャとは牡山羊であると知られるべきであり，他の家畜のことではないと定まっている」と最高のバラモンたちに言った。

聖仙たちは言った。

(4) もろもろの祭式においては，数々の（穀類の）種子によって祭るべし，というのがヴェーダの伝承であります。アジャという名をもつものは（穀類の）種子です。あなたがたは牡山羊を殺すべきではありません⁴。

(5) 家畜が殺されるべきであるというのは，よき人々のダルマではありません，神々よ。今は最高のクリタ・ユガ期です。どうして，（この時代に）家畜が殺されねばならないのですか⁵。

¹本稿は『叙事詩の宗教哲学— Mokṣadharmā-parvan 和訳研究 (LXIII)—』（信州大学教育学部研究紀論集第 12 号）に続くものである。略号などは前稿に準ずる。なお本稿で用いる主なものは下記のとおりである。

• Hopkins[1915]: E.W. Hopkins, Epic Mythology, First Edition: Strassburg, 1915, Reprint: Delhi 1974.

²P. yadā bhakto bhāgavata āsīd B. yadā bhāgavato 'tyartham āsīd K. yadā bhakto bhāgavati āsīd

³K. はこの後に次の 6 行を挿入している。(=MBh.XII.816*)

iyam vai karmabhūmiḥ syāt svargo bhogāya kalpitah /

(これは祭式の大地となろう。天界は(果報の)享受のために考えられている。)

tasmād indro mahīm prāpya yajanāya tu dikṣitah /

(それ故インドラ神は，地上に到達して，祭式のために準備した。)

savanīyapaśoḥ kāla āgate tu brhaspatiḥ /

(ソーマ祭の献供の家畜の時が至ると，プリハスパティは，)

piṣtam ānīyatām atra paśvartham iti bhāṣata /

(ここに家畜(の像)のために粉をもって来よ)と言った。)

tac chrutvā devatāḥ sarvā idam ūchur dvijottamam /

(それを聞いて，すべての神々は，最高のバラモンである)

brhaspatiḥ māṃsagrddhāḥ pṛthak pṛthag idam punaḥ (816* arimdamā) /

(プリハスパティに，肉を切望して，それぞれが繰り返しのように入った。)

⁴P. na ghnantum arhatha B.,K.: no hantum arhatha Cf.Hopkins[Great Epic]: there was no killing of animals at an aṣvamedha, in opposition to orthodox teaching that meat may be eaten at a sacrifice, p.377.10, 15.

⁵katham vadhryeta vai paśuḥ Cf.Hopkins[Great Epic]: the ahimsā doctrine of the later epic, p.378.4; Matsubara[1994]: ahimsā, one of the most important teachings in the Pañcarātra, p.147, Reference No.38.

ビーシュマは言った。

- (6) このように聖仙たちが神々と話している時、虚空に行く吉祥な最高の王ヴァスが、軍勢と戦車を伴って⁶、旅の途中この土地にやってきた。
- (7) この虚空に行くヴァス王が突然やって来るのを見て、再生族たちは、神々に言った。「この方が疑問を断ち切ってくれるでしょう。」
- (8) 祭主であり、施主であり、あらゆる生き物の幸福を願う優れて偉大な王ヴァスが、どうして正しくない言葉を語るのでしょうか。」
- (9) このように会話をしてから、神々と聖仙たちは、すぐにヴァス王に近づいて、近くから尋ねた。
- (10) 「おお王よ、何によって祭るべきですか。山羊 (aja) によってですか、もろもろの薬草によってですか。私たちのこのような疑問を断ち切って下さい。あなたは私たちにとって基準 (pramāṇa) と考えられます。」
- (11) かのヴァス王は、合掌して、彼らに尋ねた。「あなたがたの誰がどんな立場と考えられるのですか⁷、参集した方たちよ⁸、真実をお話し下さい。」

聖仙たちは言った。

- (12) もろもろの穀類によって祭るべし、というのが私たちの立場です、人々の王よ。一方、神々の立場は、家畜と考えられます。王よ、私たちにお話し下さい。

ビーシュマは言った。

- (13) 神々の考えを知って、ヴァス王は、その立場に依拠して、そこで、「アジャによって、すなわち牡山羊によって、祭るべし」とこのように語った。
- (14) すると太陽の輝きをもつ聖者たちは皆怒って、神の立場のために語った、(天空をいく) 乗物に乗っている王に言った。
- (15) 「あなたは神々の立場を支持した。それ故、天から落ちよ。今日より以後、王よ、あなたは虚空に行くことはできません。あなたは、我々の呪いによって撃たれ、大地を裂いて、地中に入らう⁹。」
- (16) その時、その瞬間に、ウパリチャラ王は、すぐに下界に至り、大地の穴に入った。しかしその時、ナーラーヤナの命令によって、記憶は彼を離れなかったのである¹⁰。

⁶P.,B.: samagrabalavāhanaḥ K. sahasrabalavāhanaḥ

⁷P. kasya vaḥ ko mataḥ pakṣo B. kasya vai ko mataḥ kāmo K. kasya vai ko mataḥ pakṣo

⁸P. samāgatāḥ B.,K.: dvijottamāḥ

⁹K. はこの後に次の 2 行を挿入している。(=MBh.XII.818*)

viruddhaṃ vedasūtrāṇām uktaṃ yadi bhaven nṛpa /

(もし王よ、(王が) そうなるのであれば、もろもろのヴェーダの経典に反することを言ったからです。)

vayaṃ viduddhavačanā yadi tatra patāmahe /

(もし私たちがそこに落ちるならば、私たちが(ヴェーダに) 反することを言ったからです。)

¹⁰P. smṛtis tv enaṃ na prajahau B. smṛtis tv evaṃ na hi jahau K. smṛtis tv evaṃ na vijahau

叙事詩の宗教哲学

- (17) しかし、神々は皆共に、動揺することなく、ヴァス王を呪いから解放する手段、王にとってのよき行為を考えた。
- (18) 「この偉大な王は我々のために呪いを得た。彼に対し、我々天に住む者すべては、好意をなすべきである。」
- (19) という認識によって確信し、すぐに神々は (īśvarāḥ) 決断して、歡喜の心をもって、このウパリチャラ王に言った。
- (20) 「汝は、バラモンに好意ある神¹¹、神とアスラの師匠であるハリを¹²信愛している。汝に満足している彼の神は、喜んで呪いから解放するであろう。
- (21) しかし、偉大な再生族たちには敬意が払われるべきである。彼らの苦行は必ず結果をもたらすのである、最上の王よ。
- (22) それゆえ、汝は突然虚空から地表に落ちたのである¹³。しかし、我々は汝に一つの恩恵を与えるであろう、最上の王よ。
- (23) 罪なき者よ、汝が、呪いの罪によって、地面の穴に入って時間を過ごす間、偉大なバラモンたちによってもろもろの祭式において正しく捧げられた「富の汁」というバターを¹⁴得るであろう。
- (24) 汝は我々の配慮によって (バターを) 得るであろう。そして病が汝に触れることはないであろう¹⁵。大地の穴の中でも、飢えと渴きはないであろう、すぐれた王よ。
- (25) 「富の汁」というバターを飲むことによって、活力が増大すれば¹⁶、かの神 (ナーラーヤナ) は、我々の (汝に対する「富の汁」という) 贈物に喜んで、(汝を) ブラフマンの世界に導くであろう。」
- (26) このように、王に恩恵を与えた後、天の住人はすべて、神々も苦行に富む聖仙たちも、自らの住居へと去った¹⁷。

¹¹P. brahmaṇyadevaṃ tvaṃ bhaktāḥ B.,K.: brahmaṇyadevabhaktas tvaṃ

¹²P. bhaktāḥ surāsuraguruṃ harim B.,K.: surāsuraguruḥ hariḥ

¹³K. はこの後に次の 2 行を挿入している。(=MBh.XII.819*, 820*)

viruddhaṃ vedasūtrāṇāṃ na vaktavyaṃ hitārthinā / (=819*)

(幸福を求める者は、もろもろのヴェーダの經典に対立することを話すべきではない。)

asmatpakṣanimittena vyasaṇaṃ prāptam idṛśam / (=820*)

(しかし汝は、我々の主張を原因として、このような窮状に至ったのである。)

¹⁴vasordhārām Cn. vasordhārety aluksamāsaḥ / (vasordhārā とは、活用語尾を伴った合成語である)

¹⁵P. āspr̥ṣet B. aspr̥ṣat K. āviśet

¹⁶tejasāpyāyitena ca Cf.Hara[1987]: *āpyai-*, vocabulary of invigoration, p.145.7.

¹⁷K. はこの詩節の ab 句の後に、次の 1 行を挿入している。(=MBh.XII.822*)

kratuṃ samāpya piṣṭena munīnāṃ vacanāt tadā /

(聖者たちの言葉に基づいて、小麦粉を用いて祭式を完了した後、)

さらに、この詩節 cd 句の後に、次の 3 行を挿入している。(=MBh.XII.823*)

gr̥hītvā dakṣiṇāṃ sarve gatāḥ svān āśramān punaḥ /

(すべての神は、謝礼を受け取って、再びそれぞれ自分の隠棲所へと去った。)

vasuṃ vicintya śakraś ca praviveśamarāvātīm /

(インドラはヴァスのことを配慮した後、アマラヴァティーに入った。)

vasur vivaragas tatra vyalīkasya phalaṃ (823* pahalād) guroḥ /

(穴に落ちたヴァスは、そこで偽りの師匠の果報を(受け取った)。)

- (27) 彼(ヴァス王)は、バーラタ族の者よ、常にヴィシュヴァクセーナ(ナーラーヤナ)に対して礼拝を行った。そして、ナーラーヤナの口から発せられた祈禱文(japya)を絶えることなく唱えた。
- (28) 彼は、地の穴に落ちていてさえも、そこでさえ、(一日に)五つの時刻に(pañcakālān),五つの儀式によって、神々の主たるハリを祭ったのである¹⁸,敵を調伏する者よ。
- (29) するとハリ・ナーラーヤナは、他に帰依することなく、真にその信愛に専念する、自己を制御したこの者の信愛に満足した。
- (30) 恩寵を与える聖なるヴィシュヌは、近くで仕える最高の鳥、大速力のガルダに、微笑むかのごとく語った¹⁹。
- (31) 「最上の鳥よ、大きな幸運ある者よ、私の言葉から理解すべし²⁰。ダルマを本性とするヴァスという名の統治者である王は、私を頼っている²¹。
- (32) 彼は、バラモンたちの怒りによって地表に落ちた。しかし、彼らすぐれたバラモンたちは(呪いを実現して)尊敬を受けた今や、汝は行くべし、最上の鳥よ。
- (33) ガルダよ、今やわが命によって、大地の穴に隠れた者のところに(行け)。地下で動き廻る優れた王を空中に行く者とせよ、すぐに。」
- (34) 風の早さのガルダは、翼を広げ、大地の穴に入った。そこには無言で座っているヴァス王がいた。
- (35) ヴィナターの子ガルダは、それからすぐに彼を持ち上げて、すばやく空中に飛び上がった。そしてそこで彼を解き放ったのである。
- (36) その瞬間、王は、再びウパリチャラ(uparicara 上方に行く者)として現れた。そして、その最上の王は、身体を伴ってブラフマンの世界に入ったのである。
- (37) このように、クンティーの子よ、この偉大な人物でさえも、神の命による言葉の誤りのために²²,バラモンたちの呪いによって、不浄な場所に²³至ったのである。
- (38) 彼はひたすら、プルシャすなわち自在者たるハリを礼拝した。それゆえ、すばやく呪いを離れ、ブラフマンの世界に達したのである。
- (39) このように²⁴,これらの人々がどのように生まれたかについて²⁵,汝にすべてを話した。またかの聖仙ナーラダがどのように白い島に行ったかについても、そのすべてを語るであろう。心専一に聞くがよい、王よ。

¹⁸ayajad dharim surapatim (9 syllables) Cf.Hopkins[Great Epic]: The Hypermetric Çloka, p.255.21.

¹⁹P. ābabbhāse smayann iva B.,K.: ābabbhāsepsitam tadā

²⁰P. gamyatām vacanān mama B.,K.: paśyatām vacanān mama

²¹P. dharmātmā māṃ samāsritaḥ B.,K.: dharmātmā saṃsītavrataḥ

²²vāgdoṣād devatājñayā Ganguli: first fell down through the curse of the Brahmanas for a fault of speech, and once more ascended to heaven at the command of the great God (Vishnu), p.129.2. Deussen: weil er sich auf Geheiss der Götter im Reden versündigt hatte, p.767, v.39. devatājñayā とは、「山羊の肉によって祭式を行うべし」という指示を指しているか。

²³P. gatir ayajvārhā B.,K.: gatir adhastāt tu

²⁴B.,K. はこの詩節の前に bhīṣma uvāca を挿入している。

²⁵P. te bhūtā manavā yathā B.,K.: saṃbhūtā mānavā yathā Cs. te mānavāḥ, saptadvīpavāsinaḥ / (te mānavāḥとは、七つの島に住む人々は、という意味である) Ganguli: the spiritual sons of Brahman, p.129.9.

[325 章] (B.338 章, C.12861-12864, K.346 章) (ナーラーヤナ章 (5) ナーラーヤナの 170 の呼称)

ビーシュマは言った。

- (1) 聖仙ナーラダは、白い大きな島に着いて、月の(ごとき)輝きをもつ清浄なかの白い人々を見た。
- (2) (ナーラダは) 頭をさげ、心から礼拝し、そして彼らも(ナーラダを) 礼拝した。(ナーラダは、神を) 見たいと願い、低唱に専念し、あらゆる苦行を続けた。
- (3) 偉大な聖者であるパラモンは、心を一点に集中して、腕を上にあげ²⁶、偏在する、グナなき偉大なアートマンに対して²⁷、賛歌を詠じた。

ナーラダは言った。

- (4) あなたに帰依します。神の神よ [1]、行為なき者よ [2]²⁸、グナなき者よ [3]、世間を観じる者よ [4]、知田者よ [5]²⁹、無限なる者よ [6(=116)]、プルシャよ [7]、偉大なプルシャよ [8]³⁰、三種のグナよ [9]、第一原因よ [10]、不死の者よ [11]³¹、天よ [12]、永遠なる者よ [13]、有であり無であり、顕現にして未顕現なる者よ [14]、天則の守護者よ [15]、太古の最初の神よ [16]、財産を与える者よ [17]、造物主よ [18]、よき造物主よ [19]、森の主よ [20]、偉大な造物主よ [21]、力ある者たちの主よ³²[22]、言葉の主よ [23]、心 (manas) の主よ [24]、世界の主よ [25]、天空の主よ [26]、風の主よ [27]、水の主よ [28]、大地の主よ [29]、方位の主よ [30]、太古の住処よ [31]³³、ブラフマンの祭官よ [32]、ブラフマンを身体とする者よ [33]、大身体をもつ者よ [34]、偉大な王よ [35]、四大王よ [36]³⁴、光輝の神よ [37]、大光輝の神よ [38]、七大光輝の神よ [39]³⁵、ヤマの眷族よ [40]、偉大なヤマの眷族よ [41]、ヤマの妻の名をもつ者よ³⁶[42]、喜足天よ [43]、大喜足天よ [44]、破壊者よ³⁷[45]、限界を与える者よ³⁸、力を行使する者よ [47]、限界なき者よ [48]³⁹、祭式よ [49]、大祭式よ [50]⁴⁰、祭式の起源よ [51]、祭式の母胎よ [52]、祭式の胎児よ [53]、祭式の心臓よ [54]、祭式において賞賛される者よ [55]、祭式の取り分を取る者よ [56]、五種の祭式の保持者よ⁴¹[57]、五

²⁶P. bhūtvaikāgramanā vipra ūrdhvaḥāhur mahāmuniḥ B.,K.: bhūtvaikāgramanā vipra ūrdhvaḥāhuḥ samāhitaḥ Cf.Hopkins[1901]: ūrdhvaḥāhuḥ samāhitaḥ shows the mingling Ṣāstra rule in Yoga-practice (e.g. MBh.XII.319.2) with the naīf tapas or untutored asceticism, p.361.21.

²⁷P. nirguṇāya mahātmane B.,K.: nirguṇāya guṇātmane Cf.Hopkins[Great Epic]: God is nirguṇa and guṇātman and nirguṇa alone and triguṇa, etc., p.121, fn.2.

²⁸niṣkriya Cf.Matsubara[1994]: the supreme God is akartṛ, pp.69.1, 105 Reference No.3.

²⁹B.,K. はこの後に、puruṣottama を挿入している。

³⁰B.,K. はこの後に、puruṣottama を挿入している。

³¹B.,K. はこの後に、amṛtākhyā anantākhyā を挿入している。

³²ūrjaspate N. ūrjaspate, ūrjaḥ brahmādayo jīvarūpāḥ paśavas teṣāṃ pate / (ūrjaspate とは、ūrjaḥ、すなわち、ブラフマーなど命我のもるもるの姿であり、獣たち、彼らの主よ、という意味である)

³³B.,K. はこの後に、guhya を挿入している。

³⁴cāturmahārājika Cf.Hopkins[Great Epic]: cāturmahārājika, the rather modern epithets, p.140.21; thoroughly Buddhistic epithet, p.391.23.

³⁵P. saptamahābhāsura B. saptamahāga K. saptamahābhāga saptamahāsvara Cf.Hopkins[Great Epic]: spatamahābhāga, called by the rather modern epithets, p.140.21.

³⁶saṃjñāsaṃjñā N. saṃjñā yamapatnī tannāmaka / (saṃjñā とは、ヤマの妻であり、それを名前とする者よ、という意味である)

³⁷P. pratardana B.,K.: pramardana

³⁸parinirmita N. parinirmitaṃ mṛtyusahāyatvena kalpitaṃ kāmarogādi / (parinirmitam とは、死の補助者と考えられる欲望や怒りなどである) B.,K. はこの後に、aparinirmita を挿入している。

³⁹P. aparinirmita B.,K.: aparinindita B.,K. はこの後に、aparimita vaśavartin avaśavartin を挿入している

⁴⁰K. はこの後に asaṃyajña を挿入している。

⁴¹P. pañcayajñadhara B.,K.: pañcayajña

つの時節の創造者となった者よ [58]⁴², パンチャラートラに属する者よ (pañcarātrika)[59], ヴァイクンタよ [60], 征服されない者よ [61], 心からなる者よ [62]⁴³, 最高の夫よ [63], よく浄化されし者よ [64], 白鳥よ [65], 最高の白鳥よ [66]⁴⁴, 最高の祭式執行者よ [67], サーンキヤ・ヨーガよ [68]⁴⁵, 不死に住する者よ [69], 黄金に住する者よ [70], ヴェーダに住する者よ [71]⁴⁶, クシャ草に住する者よ [72], ブラフマンに住する者よ [73], 蓮華に住する者よ [74], 一切の支配者よ [75]⁴⁷, あなたは世界の子孫です [76], あなたは世界の根源です⁴⁸[77], あなたの口は火です [78], (あなたは) 牝馬の口という火です (vaḍavāmukho 'gñih)[79], あなたは献供です [80], あなたは御者です [81], あなたはヴァシャット音です [82], あなたは聖音オームです [83]⁴⁹, あなたは心です [84], あなたは月です [85]⁵⁰, あなたは最初の眼です [86]⁵¹, あなたは太陽です [87], あなたはもろもろの方位の象です [88], (あなたは) 方位の光です [89]⁵², (あなたは) 馬頭です [90], 最初の三つのスバルナ賛歌よ [91]⁵³, 五火よ [92], ナーチケータという名の火に三度ともす者よ [93]⁵⁴, 六支の創造者よ [94]⁵⁵, プラークジュヨーティシャ讃歌よ [95]⁵⁶, ジュエーシュタ讃歌を詠う者よ [96], 讃歌の誓約を守る者よ [97], アタルヴァシラス・ウパニシャットよ⁵⁷[98], 五大聖典よ⁵⁸[99], 泡を飲む師匠よ [100], ヴァーラキリヤ讃歌よ [101], ヴァイカーナサよ [102], ヨーガの中断なき者よ [103]⁵⁹, 思索 (parisaṃkhyāna) の中断なき者よ [104], ユガ期の始まりよ [105], ユガ期の間よ [106], ユガ期の最後よ [107], アーカンダラよ⁶⁰[108], プラーチーナガルバよ [109], カウシカよ

⁴²P. pañcakālakartṛgate B.,K.: pañcakālakartṛpate Cf.Hopkins[Great Epic]: in relation to Pañcaçikha, the teacher of the new sect of Pañcarātras, in the hymn at xii, 339 (=P.XII.326), the god is called Pañcakālakartṛpati, Pañcarātrika ([59]), Pañcāgni ([92]), Pañcayajña ([57]), Pañcamahākālpa ([99]) (as also CitraÇikhaṇḍin ([156])), p.144, fn.1.; pañcakālakartṛpati, "lord of the five makers of time, p.40.33.

⁴³この mānasika の後に, B. は nāmanāmika, K. は nāvamika nāmanāmika を挿入している。

⁴⁴B. はこの後に, mahāhaṃsa を, K. は mahāhaṃsa paramajñeya を挿入している。

⁴⁵B.,K. はこの後に, sāmkyamūrte を挿入している。

⁴⁶P. vedeśaya B. deveśaya K. vedeśaya deveśaya

⁴⁷B.,K. はこの後に, viṣvaksena(あらゆる所に力の及ぶ者よ) を挿入している。

⁴⁸tvam jagatprakṛtiḥ / Cf.Hopkins[Great Epic]: The attribute of jagatprakṛti applied to Nārāyaṇa in the Pañcarātra hymn, p.152, fn.1.

⁴⁹B.,K. はこの後に, tvam tapas を挿入している。

⁵⁰K. はこの後に, pūrṇāṅgas を挿入している。

⁵¹P. cakṣur ādyam B.,K.: cakṣur ājyam

⁵²B.,K. はこの後に, vidigbhāno を挿入している。

⁵³P. prathamatrisauparṇa B.,K.: prathamatrisauparṇaḥ N. brahman etu mām ityādīni trīṇi suparṇāni taittirīyopaniṣadi paṭhyante / tatra prathamam savitṛdaivatyaṃ tvam jagatkartey arthaḥ catuṣkapardā yuvatīḥ supesā ityādi ṛgvedamantratrayaṃ vā prathamatrisauparṇam / (「ブラフマンたる余に赴くべし」など三種のスバルナ賛歌がタイティリヤ・ウパニシャットに説かれている(当該箇所不明)。ここは, 汝は, 最初のサヴィトリを神としてもつ世界創造者である, という意味である。あるいは「四房に編んだ髪の毛の美しい乙女は」など, リグ・ヴェーダの三つの聖句が最初の三種のスバルナ賛歌である。(RV.10.114.3)) B.,K. はこの後に, varṇadharaḥ を挿入している。

⁵⁴triṇāciketa N. triṇāciketa nāciketākhyo 'gñih trivāraṃ cito yena sa triṇāciketasaṃjña / (ある者によって, ナーチケータという名の火が三度置かれる。その者が, triṇāciketa と呼ばれる) Ganguli: Thou art He who has thrice ignited the sacrificial fire called Nachi, p.131.18.

⁵⁵P. ṣaḍaṅgavidhāna B.,K.: ṣaḍaṅganidhāna

⁵⁶prāṅjyotiṣa Ganguli: Thou art the foremost of those Brahmanas that are employed in singing the Samans in sacrifices and other religious rites, p.131.20.

⁵⁷atharvaśiraḥ Cf.Hopkins[Great Epic]: The title (Atharvaśiras) is applied to Nārāyaṇa, xii, 339, 113, (=P.XII.325.98) and the commentator explains it as referring to the Upanishad, p.46.26

⁵⁸pañcamahākālpa N. pañcamahākālpāḥ sauraśāktagañeśāśaivavaiṣṇavāgamās tatpratipādyā / (pañcamahākālpāḥとは, サウラ・シャークタ・ガーネーシャ・シャイヴァ・ヴァイシュナヴァの聖典によって説かれる者よ, という意味である)

⁵⁹K. はこの後に, abhagnavratā を挿入している。

⁶⁰ākhaṇḍala N. ākhaṇḍala indraḥ / (ākhaṇḍala とは, インドラよ, という意味である) Cf.MBh.XII.323.4.

叙事詩の宗教哲学

[110]⁶¹, 多くの人に賞賛される者よ [111], 多くの人に祭られる者よ [112]⁶², 一切の姿をもつ者よ [113], 無限に進む者よ [114], 無限に享受する者よ [115], 無限なる者よ [116(=6)], 始めなき者よ [117], 中間なき者よ [118], 未顕現を中間とする者よ [119], 未顕現を最後とする者よ [120], 誓戒に住む者よ [121], 海に住む者よ [122], 栄光に住む者よ [123], 苦行に住む者よ [124]⁶³, 美に住む者よ [125], 真知に住む者よ [126], 名誉に住む者よ [127], 幸福に住む者よ [128], 一切に住む者よ [129], ヴァースデーヴァよ [130], 一切を魅了する者よ [131]⁶⁴, 黄色い馬をもつ者よ [132]⁶⁵, 黄色い馬を供物とする者よ [133]⁶⁶, 大祭式の分与を取る者よ [134], 恩寵を与える者よ [135(=157)]⁶⁷, 禁戒・勸戒・大勸戒・苦行・過度の苦行・大苦行・一切の苦行の勸戒を保つ者よ [136], 行為停止のダルマと(ヴェーダ)学習に専念する者よ [137]⁶⁸, ヴェーダ祭式を実行する者よ [138], 不生の者よ [139], 偏在する者よ [140], 一切の見者よ [141], 知覚されざる者よ [142]⁶⁹, 不動の者よ [143], 大威光の者よ [144], 偉大身よ (māhātmya-śarīra)[145], 浄化具よ [146], 大浄化具よ [147], 黄金からなる者よ [148], 広大な者よ [149], 定義されえない者よ (apratarkya)[150], 認識されない者よ [151], 最上のブラフマンよ [152], 生類の創造者よ [153], 生類の破壊者よ [154], 大幻力をもつ者よ [155]⁷⁰, 種々の巻髪をもつ者よ [156], 恩寵を与える者よ [157(=135)], 供物の菓子の取り分を取る者よ [158], 道に通じた者よ [159]⁷¹, 渴愛を断った者よ [160], 疑いを断った者よ [161], 完全に行為を停止した者よ [162]⁷², パラモンを好む者よ [163], パラモンを好む者よ [164], 一切の姿をもつ者よ [165], 大きな姿をもつ者よ [166], 友よ [167], 信愛ある者を愛する者よ [168], パラモンの神よ [169], 私は、あなたに信愛しています。あなたを見ることを願います [170]。私は唯一の信仰の見を得るために帰依します。 [171] (Cf.Matsubara[1994]: a list of 170 names of the Supreme God, p.111, Reference No.78)

[326 章] (B.339 章, C.12865-13006, K.347 章) (ナーラーヤナ章 (6) ナーラーヤナの姿)

ビーシュマは言った。

(1) このように、秘密にして真実のもろもろの名称によって賞賛された⁷³, かの一切の姿をもつ聖な

⁶¹prācīnagarbha kauśika Cf.Hopkins[Great Epic]: Though the god is here Vishnu, I venture to think the last epithets (i.e., prācīnagarbha and kauśika) were originally applied to Īva, p.116.5.

⁶²この後に, B. は viśvakṛt を, K. は viśvakṛd viśvajit を挿入している。

⁶³この後に, B. は damāvāsa を挿入している。

⁶⁴sarvacchandaka N. sarvacchandaka sarvamanorathaprada / (sarvacchandaka とは, すべての者に満足を与える者よ, という意味である)

⁶⁵harihaya N. hariḥ kapiḥ sa eva rāmāvatāre hayo 'śvo yasya / (hari とは猿である。その猿が, ラーマの権化として, haya, すなわち, 馬である者が, harihaya である)

⁶⁶harimedha N. harimedha aśvamedha / (harimedha とは, 馬祠祭よ, という意味である)

⁶⁷B.,K. はこの後に, sukhaprada, dhanaprada, harimedha を挿入している。

⁶⁸P. nivṛttadharmapravacanagate B. nivṛttabhrama pravacanagata pṛśnigarbhapravṛtta K. nivṛttabhrama nivṛttadharmapravaranagata pravacanagata pṛśnigarbhapravṛtta N. pravacane adhyayane gataḥ sthito brahmacārī / ((pravacanagata とは) pravacane, すなわち, ヴェーダ学習に, gataḥ, すなわち, いそしむ, 梵行者という意味である)

⁶⁹P. agrāhya B.,K.: nagrahya K. はこの後に, akṣayā を挿入している。

⁷⁰mahāmāyādhara Cf.MBh.XII.323.42; Hopkins[Great Epic]: God's māyā, God is called mahāmāyādhara, p.140.20. K. はこの後に, vidyādhara yogadhara を挿入している。

⁷¹P. gatādhvan B.,K.: gatādhvara N. gatādhvara prāptayajña / (gatādhvara とは, 祭式に通曉した者よ, という意味である)

⁷²P. sarvatonivṛtta B.,K.: sarvatovṛta この後に B. は, nivṛttirūpa を, K. は nivṛttarūpa を挿入している。

⁷³K. はこの ab 句の後に次の 1 行を挿入している。

bhagavān viśvasṛk siṃhaḥ sarvamūrtimayaḥ prabhuḥ /

(一切を見る獅子であり, あらゆる形態からなり, 至尊にして威光ある,)

る神は、かの尊者ナーラダに (姿を) 見せた。

- (2) 主ナーラーヤナは、あるいは月のごとき清浄な心もち、あるいは月よりもすぐれた姿もち、あるいは火の色もち、あるいは黄金の姿もち⁷⁴、
- (3) あるいは鸚鵡の羽の色もち⁷⁵、あるいは水晶のごとき輝きもち、あるいは (眼に化粧する) 黒い軟膏の塊のようであり、あるところは黄金の輝きもち、
- (4) あるところは若芽の色をし、あるところは白色であり、あるところは黄金の色のごとくであり、あるところは猫目石のごとくに現われた (babhau)。
- (5) (神は) 青い猫目石のごとき所もあり、青いインドラ神のごとき所もあり、孔雀の首の色のごとき所もあり、真珠の首飾りのごとき所もあった。
- (6) これらの多様な色彩を姿の中に保ちつつ、永遠にして吉祥なる神は、千の目、百の頭、千の足をもち、
- (7) 千の腹と千の腕もち、あるところは (kvacit) 目に見えないと言われる⁷⁶。一つの口によって、聖音オームとそれに続くサーヴィトリー讃歌を詠いつつ、
- (8) 支配者たるハリ・ナーラーヤナ神は、残りの口々によって、四ヴェーダに述べられた財宝である⁷⁷アーラニヤカを詠った。
- (9) 祭式の主である神の支配者は、多くの手によって、祭壇、水瓶、ダルバ草たち、そして宝石の形をしたもろもろの石⁷⁸、鹿皮、木の杖、そして燃える祭火を持っていた。
- (10) この清浄な最高の自在神に、清浄な最上の再生族ナーラダは、沈黙し、敬虔に挨拶した。この頭を下げた者に、神々の第一にして不変なる神は言った。
- (11) 「偉大な聖仙たち、エーカタ、ドヴィタ、そしてトゥリタが、余を見るのを切望して、この地にやって来た⁷⁹。
- (12) そして彼らは余を見なかった⁸⁰。最高の信愛がなければ、誰も余を見ることはないであろう。汝はまさしく信愛ある者と認められる⁸¹。

⁷⁴dhiṣṇyākṛtiḥ Cs. dhiṣṇyam, nakṣatram / (dhiṣṇyam とは、星宿である)

⁷⁵P. śukapattravarṇaḥ B.,K.: śukapattranibhaḥ

⁷⁶ca avyakta iti ca kvacit Sandhi irregular: ca avyakta Cf. Oberlies[Grammar]: 1.1.1. Absence of *savarṇa-sandhi*, 1.1.1.1. -a/ā a/ā-, p.2.11)

⁷⁷P. caturvedodgatam vasu B.,K.: caturvedān giran bahūn Cs. caturvedodgatam vasu, caturvedoditaratnabhūtam, āraṇyakam upaniṣadam / (caturvedodgatam vasu とは、四ヴェーダに述べられた宝である, āraṇyakam, すなわち、ウパニシャッドを、という意味である) Cf. Hopkins[Great Epic]: rare mention of Āraṇyaka, “Hari sings the four Vedas and Āraṇyaka”, p.9.8.

⁷⁸P. darbhān maṇirupān athopalān B. śubhrān maṇin upānahau kuśān K. darbhān maṇirūpāms tathā kuśān

⁷⁹B.,K. はこの詩節の前に、śrībhagavān uvāca を挿入している。

⁸⁰dadr̥ṣire Cn. dadr̥ṣire, dadr̥ṣuḥ / padavyatyayaḥ chāndasaḥ (N. ārṣaḥ) / (dadr̥ṣire (反照態) は, dadr̥ṣuḥ (能動態) の意味である。態の変更は古形である)

⁸¹P. tvam caivaikāntiko mataḥ B.,K.: tvam caivaikāntikottama

叙事詩の宗教哲学

(13) 余のこれら数々の美しい身体は、ダルマの家で生まれたのである、再生族よ。(Cf.MBh.XII.321.8)
汝は常にこれらを敬え。汝はやって来た通りに去るがよい⁸²。

(14) そして、バラモンよ、汝が望む、余からの恩恵を選べし。一切の姿をもち、この世で不変なる
余は、今ここで汝に喜んでいるのである。」

ナーラダは言った。

(15) 神よ、今日この瞬間、私は苦行と禁戒と勸戒の果報を得ました。それは私が至尊者を見たことで
あります。

(16) 永遠なる御身が見られたこのことが、私にとっての恩恵であります。至尊にして、一切を見、一
切の形をもち、大きな威力をもつ獅子である御身が最終的に見られたことが。

ビーシュマは言った。

(17) このようにパラメーシュティンの子ナーラダに姿を示した後、(神は)さらに次のように言った。
「ナーラダよ、すぐに去るがよい。

(18) なぜならば、これら、感官をもたず食物をとることなく⁸³、余に帰依し、月のごとく輝く者たち
は、一点に集中して、余を思念するであろう。この者たちの障害とならないように。

(19) これらの完成し、大幸運をもつ者たちは、かつて専一に信仰した。彼らは、タマスとラジャスか
ら解放されて⁸⁴、余に到達するであろう。このことは疑いない。

(20) 彼は目によっては見えず、触感によっては触れられず、香りによっては嗅がれず、味を離れて
いる。

(21) そして、偏在し、観察者であり、世界のアートマンであると言われる彼に、サットヴァ・ラジャ
ス・タマスというグナたちが赴くことはない⁸⁵。

(22) 元素の集団であるもろもろの身体が滅しても、彼は滅しない。彼は、不生にして、恒常永遠であ
り、グナなく、そして部分をもたないのである⁸⁶。

(23) 彼は、二十四の諸原理を超えて、第二十五と名づけられ⁸⁷、行為のない⁸⁸、知識によって見られ
るべきプルシャと言われる。

⁸²sādhayasva yathāgatam Ganguli: do thou perform those rites that are laid down in the ordinances with respect to that worship, p.133.32. Deussen: ziehe hin, wie du gekommen bist, p.771, v.14. Esnoul[1979]: réalise ce pour quoi tu es venu, p.109, v.14.

⁸³ime hy anindriyāhārā Cs. anindriyāhārāḥ, vaśyendriyatvād viṣayaṃ na bhūñjate ity arthaḥ / (anindriyāhārāḥとは、感官は制御すべきであるから、対象を享受しない、という意味である。)

⁸⁴P. tamorajovinirmuktā B.,K.: tamorajobhir vinirmuktā Cf.Hopkins[Great Epic]: it is said that those devoid of rajas and tamas attain to God, presumably retaining sattva; but elsewhere sattva must also be lost, e.g.,335, 30 (MBh.XII.325.3), p.121, fn.2.

⁸⁵na guṇās taṃ bhajanti vai Cf.Hopkins[Great Epic]: They (guṇās) do not affect God, p.121, fn.2.

⁸⁶nirguṇo niṣkalas tathā Ca. niṣkalaḥ, śabdādīpañcaguṇāṭīṭaḥ / (niṣkalaḥとは、音声など五種の性質を超えている、という意味である) Cf.Hopkins[Great Epic]: He (personal God) is the witness devoid of guṇas, and of kalās p.134, fn.1.

⁸⁷dvirdvādaśebhyas tattvabhyāḥ khyāto yaḥ pañcaviṃśakaḥ Cf.Hopkins[Great Epic]: personal God is the twenty-fifth, beyond the twice twelve tattvas, p.134, fn.1.

⁸⁸puruṣo niṣkriyāś ca Cf.Matsubara[1994]: the supreme God is *akarṣ*, p.69.1, Reference No.3 (p.105).

- (24) 彼に到達して、(人々は)この世で解脱して存在するのである、最高の再生族よ⁸⁹、彼が、ヴァースデーヴァであり⁹⁰、永遠なる最高のアートマンであると知れ。
- (25) ナーラダよ、神の偉大さと栄光を見よ。彼は、浄不浄のもろもろの行為によって決して汚れることはないのである。
- (26) (人は)あらゆる身体に存在し、そして行動するこれらもろもろのグナを、サットヴァ、ラジャス、タマスと呼ぶ。
- (27) 知田者は、これらのグナを享受するのである。彼はこれらのグナによって享受されることはない。(知田者は)グナなく、グナの享受者であり、グナの創造者であり、グナを超えている⁹¹。
- (28) 世界の基盤である地は、水たちの中に帰滅するのである、神仙よ。水たちは、火の中に帰滅し、火は風の中に帰滅する。
- (29) 風は、虚空に帰滅し、虚空はマナス (manas 心) の中に (帰滅する)。マナスは最高の元素 (bhūta) であり、それ (マナス) は、未顕現 (avyakta) の中に帰滅するのである。
- (30) 未顕現は、行為なきプルシャに帰滅するのである⁹²、バラモンよ。この永遠のプルシャより高位のものは存在しないのである。
- (31) なぜならば、かの唯一にして永遠なるプルシャであるヴァースデーヴァ以外には、世界には、動くものであれ、動かぬものであれ、永遠の存在 (bhūta) はないのである。大きな力をもつヴァースデーヴァはあらゆる生き物の本性であるから⁹³。
- (32) 地・風・虚空・水たち、そして五番目として火。これら力あるもの達 (mahātmānaḥ) が集まると、身体と呼ばれるのである⁹⁴。
- (33) バラモンよ、その足どり軽き⁹⁵目に見えぬ者が、それ (身体) に入る⁹⁶。それが誕生である⁹⁷。そしてその威力ある者が、身体を動かすのである。

⁸⁹P. dvijasattama B.,K.: dvijasattamāḥ

⁹⁰sa vāsudevo Cf.Matsubara[1994]: accessibility of Vāsudeva, p.97.8; Vāsudeva, the first *vyūha*, described in vv.25-43, p.120.6.

⁹¹P.,B.: guṇādhikāḥ K. guṇātigāḥ Cn. guṇādhikāḥ, guṇebhyo 'tiriktaḥ / (guṇādhikāḥとは、もろもろのグナとは異なる、という意味である) Cf.Hopkins[Great Epic]: Difference between Sāṃkhya and Yoga, God as a conditioned being, spirit, enjoys the guṇas, as in xii. 340 (=P.XII.326), where the twenty-fifth principle is guṇabhuj or enjoyer of guṇas as well as the superior creator of guṇas, guṇasraṣṭā, guṇādhikāḥ, p.112.29ff.

⁹²puruṣe brahman niṣkriye sampralīyate Cf.Hopkins[Great Epic]: the Unmanifest is resolved into Puruṣa, p.134, fn.1.; Matsubara[1994]: Concept of the Supreme God, *niṣkriya*, p.105, Reference No.3.

⁹³sarvabhūtātmabhūto hi Cf.Johnston[1937]: Vāsudeva, *sarvabhūtātmabhūta*, p.49.4; Matsubara[1994]: Vāsudeva, as the immanent God, p.94.25.

⁹⁴te sametā mahātmānaḥ śarīram iti samjñitam / Cf.Oberlies[Grammar]: 10.2. Syntactical irregularities, 10.2.1. Lack of concord between adjective and substantive, (II) as to number, (v.l. *saṃjñitāḥ*), p.297.12.

⁹⁵laghuvikramāḥ Cs. laghuvikramāḥ, kṣiprakārī / (laghuvikramāḥとは、動作の早い者が、という意味である)

⁹⁶āviśati Cn. āviśatīti praveśoktyā pāñcarātrābhīmato jīvotpattipakṣo 'pāstaḥ / (āviśati というように、侵入の語によって、パンチャラートラ派によって考えられた、jīva 命我の誕生という立場は否定された)

⁹⁷utpanna eva bhavati Cv. śarīre utpanne saty eva prabhur iti vacanān na jīvo 'tra grāhyaḥ / utpattisamaye eva śarīraceṣṭakatvasya durbale śīśāv asaṃbhavāc ca / (「身体が生じた時、威力あるものが」という言葉から、命我はここでは捉えられない。誕生の時には、身体を動かす者は、力弱い幼児には、存在しないのである。)

叙事詩の宗教哲学

- (34) 元素の集合なくして身体は存在しない。そしてバラモンよ、命我 (jīva) なしに、諸元素が⁹⁸(身体を)動かすことはない。
- (35) その命我がシェーシャ竜、(あるいは)威力あるサンカルシャナと考えられる⁹⁹。それ(サンカルシャナ)から、自らの行為によってサナトクマラの性質を得る者に¹⁰⁰、(cf.MBh.XII.326.68)
- (36) 帰滅の時、あらゆる生き物が至るものがあらゆる生き物のマナスであり、プラドユムナと呼ばれる。(Cf.MBh.XII.326.68)
- (37) それ(プラドユムナ)から生まれ、原因と結果の創造者であり、動くもの・動かぬものからなる世界を支配する者、それがアニルツダである¹⁰¹。彼は、支配者であり、あらゆる行為の中に現われる¹⁰²。(Cf.MBh.XII.326.69)
- (38) 至尊なるヴァースデーヴァはグナなきを本性とする知田者である¹⁰³。至尊なる彼こそが命我であり、力あるサンカルシャナであると、知るべし。
- (39) サンカルシャナから、プラドユムナが(生じる)。彼は、マナスとして存在する (manobhūta) と言われる。また、プラドユムナからアニルツダが(生じる)。彼は、自我意識 (ahaṃkāra) であり、大自在者である¹⁰⁴。
- (40) 余から、動くもの・動かぬものからなる一切の世界が生じるのである。そして(余から)不滅のものと滅するもの、有と非有が(生じるのである)、ナーラダよ。
- (41) 余に帰依する人々は、余に入って、この世で解脱するのである。なぜならば、余は、第二十五の行為なきブルシャとして知られるものであるから¹⁰⁵。
- (42) (余は)グナなく、部分なく、対立物なく、所有物もない。しかし、汝によって、このように知られることはない。姿あるもの (rūpavān) と見られるのである。余は、その気になれば、一瞬にして姿を消すであろう。なぜならば余は、世界の支配者であり、世界の師であるから。

⁹⁸P. dhātavaś B.,K.: vāyavaś

⁹⁹sa jīvaḥ paraśaṃkhyātaḥ śeṣaḥ saṃkarṣaṇaḥ prabhūḥ Cv. jīvayatīti jīvo nārāyaṇaḥ / (活かす、ということから命我と言われる。それはナーラーヤナ神である) Cv. śeṣaḥ śiṣyate pralaye 'piti śeṣaḥ / (śeṣaḥとは、帰滅においても残るので、シェーシャ(残余)と言われる) Cs. saṃkarṣaṇa eva pātāle 'nantā bhūtvā pṛthivīm dhārayati / (saṃkarṣaṇaḥは、地下界でアナンターとなって大地を支えるのである)

¹⁰⁰P. tasmāt sanatkumāratvaṃ yo labheta svarkarmaṇā B.,K.: tasmāt sanatkumāratvaṃ yo 'labhat svena karmaṇā Cn. sanatkumāratvaṃ, jīvanmuktatvam / (sanatkumāratvam とは、生前解脱という性格を、という意味である)

¹⁰¹so 'niruddhaḥ Cf.Gonda[1969]: Aniruddha, "the Unobstructed or Self-willed One", one of the god's names to be invoked in the worship of Viṣṇu, p.239.15.

¹⁰²P.,K.: vyaktiḥ sā sarvakarmasu B. 'vyaktaḥ sā sarvakarmasu Cs. vyaktiḥ sarveṣu karmasu, sādhu-paritrāṇadharmasamsthāpanabhaktānugrahādisarvakāryeṣu sā vyaktiḥ, so 'niruddho mātsyakūrmādirūpeṇa prādurbhavatyī arthaḥ / (vyaktiḥ sarveṣu karmasu とは、善の守護、ダルマの確立、信者の保護などのあらゆる行為における顕現ということであり、so 'niruddhaḥ、それがアニルツダであり、魚や亀などの姿によって現われる、という意味である)

¹⁰³vāsudevo bhagavān kṣetrañño nirguṇātmakaḥ Cf.Johnston[1937]: Vāsudeva is the *kṣetrañña*, and Saṃkarṣaṇa the *jīva*, p.45.2; Matsubara[1994]: Vāsudeva, immanent God, *kṣetrañña*, p.94.27.

¹⁰⁴P. maheśvaraḥ B.,K.: sa īśvaraḥ

¹⁰⁵puruṣo jñeyo niṣkriyaḥ Cf.Matsubara[1994]: the supreme God is *akarṣṭ*, p.69.1, Reference No.3 (p.105).

- (43) 汝が余と見るこの幻は¹⁰⁶、余が創造したのである、ナーラダよ。余はあらゆる存在の属性を (sarvabhūtaguṇair) そなえているが、汝はそのように余を認識できない。以上のように、余は、(余の) 四種の姿について¹⁰⁷正しく汝に語った。
- (44) これらの、大きな幸運をもつ成就した人々は、専一の信仰者 (ekāntinaḥ) たちであった。彼らは、タマスとラジャスから解放されて、余に入るであろう、聖者よ¹⁰⁸。
- (45) 余は、創造者であり、結果であり原因である、ナーラダよ¹⁰⁹。余は、命我 (jīva) と呼ばれている。命我は余の中に置かれているのである (samāhitāḥ)。この点に関して、汝は「私は命我を見た」と認識してはならない¹¹⁰。
- (46) 余は、パラモンよ、あらゆるところにいる。余は、生き物の集団の内的アートマンである (bhūtagrāmāntarātmakāḥ)。生き物の集団のもろもろの身体が滅する時に、余が滅することはない¹¹¹。
- (47) ヒラニヤガルバ、世界の始まり (lokādīḥ)、四つの顔をもつ者、言葉では言い表せない者¹¹²、ブラフマー神、永遠なる神、(これらは) 余の多くの目的を考慮した (名称) である¹¹³。(Cf.MBh.XII.330.56)
- (48) 余の右側に立つ十一体のルドラたちを見よ。そして同様に、余の左側に立つ十二体のアーディトヤたちを見よ。
- (49) 余の前には最上の神々である八体のヴァスたち (が立つの) を見よ。余の背後には二柱の医の神、ナーサトヤとダスラが立つのを見よ。
- (50) (余の中に) すべてのブラジャーパティたちを見よ、そして七人の聖仙たちを見よ。もろもろのヴェーダを、百の祭式を、甘露を、もろもろの薬草を見よ。
- (51) もろもろの苦行を、もろもろの勸戒を、個々に規定されたもろもろの禁戒を、そして (余の中で) 一つに結びついて形をとった八種の自在を¹¹⁴見よ。

¹⁰⁶māyā hy eṣā Cf.Hopkins[Great Epic]: māyā, trully illusion, p.140.22.

¹⁰⁷mūrticatuṣṭayam Cf.Matsubara [1994]: Vyūha theory, mūrti-catuṣṭayam, p.119.13.

¹⁰⁸以下の3詩節 (P.44 - 46, B.47-49, K.47 - 49) は、三本で順序が一致しない。(P.44=B.49=K.48, P.45ab=B.omitted=K.49ab, P.45cd=B.47ab=K.46ab, P.45ef=B.47cd=K.46cd, P.46=B.48=K.47)

¹⁰⁹この P.45ab 句の後に、K. は次の4行を挿入している。

na dr̥śyaś cakṣuṣā devaḥ spr̥śyo na sparśanena ca / (神は、眼によっては見ることができず、触感によっては触れられない。)

āghreyo naiva gandhena rasena ca visarjitaḥ / (匂いによって嗅ぐことはできず、味によって去られている。)

sattvaṃ rajasa tamaś caiva na guṇāś te bhavanti hi / (サットヴァ、ラジャス、タマスというこれらのグナたちは (神には) ない。)

sa hi sarvagataḥ sāksī lokasyātmēti kathyate / (彼の神は、遍在し、観察者であり、世界のアートマンと言われる。)

¹¹⁰P.,K.: maivaṃ te buddhir atrābhūd B. naivaṃ te buddhir abhūd Cf.Oberlies[Grammar]: 6.5. Constructions with mā, the augment not dropped, p.185.5.

¹¹¹na naśāmy Cf.Critical Notes: na naśāmi, irregular, almost as in what is called "Hybrid Sanskrit", P.vol.16, p.2226(left), v.46

¹¹²P. caturvaktro niruktagaḥ B.,K.: caturvaktro 'niruktagaḥ Cs. niruktāni nāmāni gamayantīti niruktagaḥ / (niruktāni, すなわち、もろもろの名前を、理解させるので、niruktagaḥと言われる) Ganguli: who cannot be understood with the aid of Nirukta, p.136.5. Deussen は、anirukta に関連して、Taitt.Up. 2.4の参照を指示している。(p.774, v.50) caturvaktro niruktagaḥという表現は、MBh.XII.330.56にもあり、Hopkins は、'niruktagaḥ と読むことを提案している。(Hopkins[Great Epic]: where the avagraha is certainly required, "inexplicable", despite Taitt.Up. 2.6, p.14, fn.2) Moniel: niruktaga, m. 'penetrator of mysteries', Name of Brahmā, Critical Notes: niruktagaḥ i.e. niruktaviśayaḥ, P.vol.16, p.2226(left), v.47.

¹¹³bahvarthacintakaḥ Cs. bahvarthacintakaḥ, bahūnām rūpānām vyākartā / (bahvarthacintakaḥとは、多くの形象の創造者である、という意味である)

B.,K. はこの後に次の1行を挿入している。(=MBh.XII.833*)

lalāṭāc caiva me rudro devaḥ krodhād viniṣṛtaḥ / (ルドラは、(余の) 怒りによって余の額から創造された。)

¹¹⁴tathāṣṭagaṇam aiśvaryaṃ Cf.Hopkins[1901]: Yoga-powers alluded to as aṣṭagaṇam aiśvaryaṃ, p.358.3.

叙事詩の宗教哲学

- (52) 幸福の女神シュリーを、美の女神ラクシュミーを、名声の女神キールティを、大地を、山岳を、もろもろのヴェーダの母、すなわち、余の中にいる女神サラスヴァティーを見よ。
- (53) ナーラダよ、星々の中で最もすぐれた天空を動く北極星を見よ。水を保つもろもろの海を、もろもろの湖を、そしてもろもろの川を見よ。
- (54) 形ある四種の祖霊の群を見よ、最善の人よ。これら三種のグナが形をとらずに余の中にあるのを見よ。
- (55) 神の祭祀 (devakārya) よりも、尊者よ、祖霊の祭祀 (pitṛkārya) がすぐれている。余は、原初より、神々と祖霊たちの唯一の父 (pitṛ) である。
- (56) 余は、西北の海において¹¹⁵、馬頭となって、正しく捧げられた神への供物 (havya) と信仰を伴った祖霊への供物 (kavya) を呑みこむのである。
- (57) かつて余が創造したブラフマー神は、余の祭式を自ら行った。それ故、余は喜び、彼にもろもろの無上の恩恵を与えた。
- (58) (恩恵とは) 劫の始めに、余の息子であること、世界の監視者であることである。自我意識という名前は、(ブラフマー神の) 別名である¹¹⁶。
- (59) 汝によって作られた規範を (maryādām) 超える者は誰もいない。ブラフマー神よ、汝は、恩恵を望む人々に対して、恩恵を与える者となるであろう¹¹⁷。
- (60) 苦行に富む者よ、汝は、神と悪魔の群々、聖仙たち、祖霊たち、種々の生き物たちから、尊敬される者となるであろう、大きな幸運をもつ者よ、常に誓約を守る者よ。
- (61) 余は、常に神々の行為の中に顕現するであろう。ブラフマー神よ、余は汝によって教えられ、そして命じられるであろう。あたかも息子のよう。
- (62) 喜んだ余は、あれやこれやの美しい贈物を、無限の光をもつブラフマー神に与えた後、無活動に専念した¹¹⁸。
- (63) 最高の無活動とは、あらゆるダルマの消滅 (nirvāṇa) であると伝えられている。それゆえ、人は無活動に達して、完全に静まって振る舞うべし。

¹¹⁵samudre paścimottare Cf.MBh.XII.322.7 (ālokayann uttarapaścimena)

¹¹⁶ahaṃkāraḥ caiva nāma paryāyavācakaḥ Ca. ahaṃkāraḥ, sābhimānam aham iti paryāyākṛtaḥ, matparyāyarūpaḥ brahma / (ahaṃkāraḥ とは「私は、願望をもつ」というように、「私」の同意語によってつくられたもの、すなわち「私」の同意語の姿をとるブラフマンである) Cf.Hopkins[Great Epic]: egoism (ahaṃkāra) in the pure dogma of the Sāṃkhya creates everything, while in the theistic religion the personal God is the creator, p.106.11

¹¹⁷この第 59 詩節から第 61 詩節は、ナーラーヤナがブラフマー神に対して語る形式になっている。

¹¹⁸nivṛtiparamaḥ Cs.nivṛtiparamaḥ, sargavyāpārād uparataḥ / (nivṛtiparamaḥとは、創造の作業を停止した、という意味である)

K. は P.B. の ab 句と cd 句の間に次の 1 行を挿入している。(=MBh.XII.834*)

evaṃ rudrāya manave indrāyāmitatejase /

(同様に、ルドラ、マヌ、無量の光をもつインドラにも(恩恵を与えた後)、)

- (64) サーンキヤの教義を確信する論師たちは、余を¹¹⁹、真知 (vidyā) という友人をもち、太陽に住む永遠のカピラと呼んだ¹²⁰。
- (65) この至尊者はヒラニヤガルバとして (ヴェーダの) 讃歌の中で大変賞賛されている¹²¹。それ故余は、もろもろのヨーガ聖典において¹²²、「ヨーガを道とする者」と¹²³呼ばれるのである、ブラフマー神よ。
- (66) このように余は (地上の) 顕現に至っても¹²⁴、永遠に天空にとどまるであろう。それから千ユガの終りに¹²⁵、動不動の生き物たちを自分の中に吸収した後 (kṛtvātmasthāni), 再び世界を滅するであろう。
- (67) 余は、唯一者として、真知 (vidyā) とともに、楽しく過ごすであろう、すぐれた再生族よ¹²⁶。そして再び、真知によって¹²⁷一切の世界をここに創造するであろう。
- (68) (この創造において) 余の第四の姿 (ヴァースデーヴァ) は、不変のシェーシャ竜を創造した。彼はサンカルシャナと言われ¹²⁸、彼もまたブラドユムナを生じた。(Cf.MBh.VI.61.65, XII.326.35,36)
- (69) 余はブラドユムナからアニルツダとして生まれた。余の創造は繰り返されるのである。同様にして、アニルツダからブラフマー神が生じ、そこに原初の蓮が生じたのである¹²⁹。(Cf.MBh.VI.61.66, XII.326.37)
- (70) ブラフマー神から、動・不動の一切の存在が生じた。この創造を、もろもろの劫の最初に繰り返されるものと知れ。
- (71) 太陽の進行によってこの世には日の出と日の入りがあり、(太陽が) 没したならば¹³⁰、量り知れない威力をもつ時 (kāla) が、力まかせに再び (太陽を) 連れて来る¹³¹。それと同様に、余は、あらゆる生き物の幸福のために、大地を、力に訴えて、取って来るであろう。(Cf.Hopkins[1915]: Avatars of Viṣṇu, p.217, §156)

¹¹⁹P.,K.: mām ādityasthaṃ sanātanam B. ca ādityasthaṃ samāhitam (sandhi irregular)

¹²⁰kapilaṃ prāhur Cf.Hopkins[Great Epic]: the supreme spirit as Kapila, p.98, fn.1.

¹²¹P.,B.: suṣṭutaḥ K. saṃstutaḥ

¹²²yogaśāstreṣu Cf.Hopkins[Great Epic]: Čāstra of the Yoga, as opposed to jñāna of the Sāṃkhya, p.100.25.

¹²³P.,K.: yogagatir B. yogaratir

¹²⁴P. vyaktim āgamyā B. vyaktim āgatya K. vyaktim āśritya Cf.Matsubara[1994]: the first mention of the Vyūhas, vv.66-70, the term *vyūha* still absent, pp.119.17-120.1.

¹²⁵yugasahasrānte Cf.Matsubara[1994]: *yugasahasra*, a cosmic Day, p.145, Reference No.10.

¹²⁶P. ekākī vidyaya sārthaṃ vihariṣye dvijottama (B. vihariṣye jagat punaḥ K. saṃhariṣye jagat punaḥ) Cf.Hopkins[Great Epic]: He (God) exists “alone with wisdom”, till he makes the worlds, each succeeding aeon, p.104.15.

¹²⁷vidyayā Ca. vidyayā, asādhāraṇena tattvajñānena / (vidyayā とは、他と共通するもののない真実の知識によって、という意味である) Cf.Matsubara[1994]: *vidyā—śakti* element, p.145, Reference No.11.

¹²⁸sa hi saṃkarśanaḥ Cf.Matsubara[1994]: identification of Śeṣa and Saṃkarśana, p.145, Reference No.12.

¹²⁹P. tatrādikamalodbhavaḥ B.,K.: tannābhikamalodbhavaḥ

¹³⁰P. naṣṭau B.,K.: naṣṭe

¹³¹K. はこすなわち P.71cd(=B.76ab) の後で、347 章を終りとし、次章 348 章の冒頭部分として、ヴィシュヌの十の権化を述べる以下の 10 行を挿入している。(=MBh.XII.835*) そのため P.326.71ef(=B.339.76cd) は K.348.5cd に対応することになる。

bhīṣma uvāca / (ビーシュマは言った。)

nāradaḥ pariprapaccha bhḡavantam janārdanam /

(ナラダは至尊なるジャーナルダナ (ヴィシュヌ神) に尋ねた。)

ekārṇave mahāghore naṣṭe sthāvarajaṅgame /

(「大轟音の一つの海の中に動くもの・動かぬものが滅した時、)

keṣu keṣu ca bhāveṣu draṣṭavyo 'si mahāprabho /

叙事詩の宗教哲学

- (72) 生き物たちによって全身を覆われて、(海中に) 没した大地を、猪の姿をして、余は、本来の場所に戻すであろう。
- (73) 余は、ディティの息子で力自慢のヒラニヤ・アクシャを殺すであろう。さらに余は、ナラシンハ(人獅子)の姿(vapus)をして、祭りを妨げるディティの息子ヒラニヤ・カシブもまた神々のために(surakārye) 殺すであろう。
- (74) ヴィローチャナの息子、大力のバリは、偉大なアスラとなるであろう¹³²。そして彼は、インドラをその王位から追放するであろう。
- (75) 三界が彼によって奪われ、インドラが失望した時、余は、アディティとカシュヤパの間の第十二番目の息子として生まれるであろう¹³³。
- (76) そして、量り知れない輝きをもつインドラに(再び)王位を与えるであろう。神々をそれぞれの場所に住まわせるであろう、ナーラダよ。そしてバリを地獄の底に住む者とするであろう¹³⁴。

(あなたは、一体どんな存在の中に見られるのですか、大きな威光をもつ方よ。』)

śrībhagavān uvāca / (至尊者は言った)

śṛṇu nārada tattvena prādurbhāvān mahāmune /

(ナーラダよ、(余の) 顕現した数々の状態を正しく聞くべし、偉大な尊者よ。)

matsyaḥ kūrmo varāhaś ca narasiṃho `tha vāmanaḥ /

(魚、亀、猪、ナラシンハ、そして小人、)

rāmo rāmaś ca rāmaś ca buddhaḥ (835* kṛṣṇaḥ) kalkīti te daśa /2/

((パラシュ) ラーマ、ラーマ、(パラパドラ) ラーマ、ブッダ、カルキンというこれら十である。)

pūrvaṃ mīno bhaviṣyāmi sthāpayiṣyāmy ahaṃ prajāḥ /

(最初に、余は魚となり、人々を安定させるであろう。)

lokān vai dhārayiṣyāmi majjamānān mahārṇave /3/

(大海に沈みつつある諸世界を支えるであろう。)

dviṭīyaḥ kūrmarūpo me hemakūtanibhaḥ smṛtaḥ /

(第二に余の亀の姿はヘーマクンタ山のごとくであると伝えられている。)

mandaraṃ dhārayiṣyāmi amṛtārthaṃ dvijottama /4/

(不死の甘露のためにマンガラ山を支えるであろう、再生族のすぐれた者よ。)

magnāṃ mahārṇave ghore bhārākrāntāṃ bhuvam punaḥ /

(重荷に圧迫されて恐ろしい大海に沈んだ大地を、再び、)

¹³²mahāsuraḥ(b 句) bhaviṣyati(c 句) B.,K. は P.ab 句の後に次の 1 行を挿入している。(=MBh.XII.836*) avadhyāḥ sarvalokānāṃ sa devāsuraḥrakṣasām /

(彼は、全世界の神・悪魔・羅刹たちにとって打ち勝ちがたい者となるであろう。)

この行を加えて読めば、「大力の、大悪魔バリは、全世界の神・悪魔・羅刹たちにとって打ち勝ち難いものとなるであろう」となる。

¹³³K. はこの後に次の 6 行を挿入している。(=MBh.XII.837*)

vaṭur (837* jaṭi) gatvā yajñasadaḥ stūyamāno dvijottamaiḥ /

(子供となって、祭りの集会に行き、再生族たちによって賞賛されつつ、)

yajñastutiṃ (837* -stavaṃ) kariṣyāmi śrutvā pṛito bhaved baliḥ /

(祭りの称賛を行うであろう。それを聞いてバリはよろこぶであろう。)

kim icchasi vaṭo brūhīty ukto yāce mahadvaram /

(「子よ、何を望みますか。言いなさい」と言われて、大きな贈物を望むであろう。)

dīyatāṃ tripadimātram iti yāce mahāsuraṃ /

(「三分(の水?)を下さい」と偉大なアスラに望むであろう。)

sa dadyān mayi sampṛītaḥ pratiśiddhaś ca mantrabhiḥ /

(彼は、余に満足して、大臣たちによって反対されても、与えるであろう。)

yāvaj jalam hastagataṃ tribhir vikramaṇair yutam (837* vṛtam) /

(手にある水が三分になるまで。)

¹³⁴B.,K. はこの後に次の 1 行を挿入している。(=MBh.XII.838*)

dānavam ca baliśreṣṭham (838* balināṃ śreṣṭham) avadhyam sarvadaivataiḥ /

(最上のバリ、すなわち、あらゆる神々によって打ち勝ちがたいダーナヴァを。)

- (77) トレーター・ユガ期においては、余は、ブリグの家系を継ぐラーマとなるであろう。そして多くの軍勢と戦車をもつクシャトリヤを全滅するであろう。
- (78) トレーター・ユガ(の終わり)とドヴァーパラ・ユガ(の始まり)の薄明期に到達した時には、余はダシャラタ王の子ラーマとなって¹³⁵、世界の王となるであろう。
- (79) プラジャーパティの二人の息子である聖仙エーカタとドゥヴィタは、トゥリタに対する暴行のために、醜い猿となるであろう¹³⁶。
- (80) 二人の子孫として生まれる者は猿となるであろう¹³⁷。彼らは、神のための行為において、余を助ける者となるであろう、再生族よ。
- (81) そして、羅刹の主であり、世界を苦しめ、プラスタヤの家系を汚す恐ろしいラーヴァナを、戦闘において¹³⁸一族とともに殺すであろう¹³⁹。
- (82) ドヴァーパラ・ユガとカリ・ユガの薄明期の終わりには、カンサのために、マトウラーに現われるであろう。
- (83) そこで余は、神々を苦しめる数多くのダーナヴァたちを殺して、クシャスタリー、すなわちドヴァーラカーの町を、住居とするであろう¹⁴⁰。
- (84) 余は、その町に住んで、アディティに敵対する、ナラカ、パウマ、ムラ¹⁴¹、ピータというダーナヴァを殺すであろう。
- (85) 心地よく、多くの富をもつブラーグジョーティシャの町を、最高のダーナヴァを殺した後、クシャスタリーに運ぶであろう¹⁴²。
- (86) そして、バーナの喜びと幸福を願うシヴァとスカンダを¹⁴³、神の世界で敬礼され、奮闘するこの二柱の神を、征服するであろう。

¹³⁵P.,K.: rāmo dāśarathir bhutvā B. ahaṃ dāśarathī rāmo

¹³⁶P. prāpsyato B.,K.: prāpsyete Ca. āraṇyakoktavidhayā golobhāt tritamaṃ kūpe niksipya ekatadvitau, tritabhātarau, tena pāpena vānarau vālisugrīvau bhaviṣyataḥ / (『森林の章』に述べられた部分によると、牛の強奪のため、トリタの兄弟エーカタとドヴィタは、トリタを井戸に投げ込んで、その罪によってヴァーリンとスグリーヴァという猿になるであろう) Cs. vānarākhyam vairūpyam / (猿と呼ばれる醜さに(なるであろう)、という意味である)

¹³⁷B.,K. はこの後に次の 1 行を挿入している。(=MBh.XII.840*)

mahābalā mahāvīryāḥ śakratulyaparākramāḥ / (大力、大勇で、インドラに匹敵する強さをもつ、)

¹³⁸P. saṃkhye B.,K.: raudraṃ

¹³⁹K. はこの後に次の 2 行を挿入している。(Cf.MBh.XII.841*)

vibhīṣaṇāya dāsyāmi rājyaṃ tasya yathākramam /

(ヴィビーシャナには、功績に応じて、彼の国を与えるであろう。)

ayodhyāvāsinaḥ sarvān eṣye 'haṃ lokam avyayam /

(余は、すべてのアヨーディーヤの住民たちに対して、世界を動揺なきものとするであろう。)

¹⁴⁰P.,K.: kariṣyāmi nivāsam B. kariṣyāmi nive'sam

¹⁴¹P.,K.: muraṃ B. guruṃ

¹⁴²K. はこの後に次の 3 行を挿入している。(=MBh.XII.843*)

kṛkalāsabhūtam ca nrgaṃ mocayīṣye ca vai punaḥ /

tatra (843* tataḥ) pauṭranimittena gatvā vai ṣoṇitam puram /

(それからそこで孫のためにショーニタの町に行き、カメレオンとなったヌリガを再び解放せしめるであろう。)

vānasya ca puram gatvā kariṣye kadanam mahat / (そしてヴァーナの町に行き、大破壊を行うであろう。)

¹⁴³P. śaṃkaram ca mahāseṇam bānapriyahitaiṣiṇam B. maheśvaramahāseṇau bānapriyahitaiṣiṇau K. śaṃkaram samahāseṇam bānapriyahite ratam

叙事詩の宗教哲学

- (87) それからバリの息子，千の腕をもつバーナを征服し，そして空中の町サウバに住む者すべてを滅するであろう。
- (88) (父) ガルガ仙の力に満たされたカーラヤヴァナという名の者を¹⁴⁴，私は殺すであろう，最上の再生族よ¹⁴⁵。
- (89) あらゆる王に対立する大力のアスラ，ジャラーサンダは，ギリヴラジャにおいて地上の王として繁栄するであろう。そして彼は，余の知力の働きによって (buddhiparispanḍāt) 殺されるであろう¹⁴⁶。
- (90) 力ある王たちがすべて地上において戦うとき，アルジュナが余の唯一のよき友となるであろう¹⁴⁷。
- (91) 世間の人々は将来このように語るであろう。「ナラとナーラーヤナという二人の強力にして自在なる聖仙が，世界の利益のために，クシャトリヤを滅ぼした」と¹⁴⁸。
- (92) 余は，大地の荷物を望み通りに降ろした後，あらゆるサートヴァタ派の主な人々と，ドヴァーラカーの住人に対して，最高の善人よ，自分の親族さえも滅ぼす¹⁴⁹恐ろしい帰滅を実行するであろう¹⁵⁰。
- (93) 余は四つの姿をして¹⁵¹，もろもろの量り知れない行為を為した後，バラモンによって称賛され

¹⁴⁴yaḥ kālayavanaḥ khyāto gargatejobhisamvṛtaḥ Cf.Hopkins[Great Epic]: kālajñāna, "knowledge of time", attributed to Garga, who is associated with Kālayavana, p.15.14; Kālayavana who had the Garga-glory, p.392, fn.2.

¹⁴⁵K. はこの後に次の 9 行を挿入している。(=MBh.XII.844*, 845*)

kamṣaṃ keśiṃ tathākṛūrāṃ ariṣṭaṃ ca mahāsuraṃ /
 (カンサ王を，そして残忍なケーシを，偉大なアスラのアリシュタを，)
 cānūraṃ ca mahāvīryaṃ muṣṭikaṃ ca mahābalaṃ /
 (そして大勇のチャーヌーラを，大力のムシュティカを，)
 pralambaṃ dhenukaṃ caiva ariṣṭaṃ vṛṣarūpiṇaṃ /
 (ブラランバを，デーヌカを，牝牛の姿をしたアリシュタを，)
 kālīyaṃ ca vaśe kṛtvā yamunāyā mahāhrade /31/
 (そしてカーリーヤ竜をヤムナー川の太湖で，征服した後で，(殺すであろう。))
 gokuleṣu tataḥ paścād gavārthe tu mahāgirim /
 saptaṛātraṃ dhariṣyāmi varṣamāṇe tu vāsave /
 (その後，インドラが雨降らす時には，もろもろの牛小屋にいる牝牛のために，大きな山を七晩保持するであろう。)
 apakrānte tato varṣe girimūrdhni vyavasthitaḥ / (それから雨が止んだならば，山頂にとどまって，)
 indreṇa saha saṃvādaṃ kariṣyāmi tadā dvija / (その時には，インドラと対話をするであろう，再生族よ。)
 laghv ācchidya dhanam sarvaṃ vāsudevaṃ ca paundrakam / (=845*)
 (ブンドラ国の王ヴァースデーヴァのすべての財産を長い間奪い去って，)

¹⁴⁶この詩節の後に B..K. は次の 1 行を挿入している。(=MBh.XII.846*)

śiśupālaṃ vadhiṣyāmi yajñe dharmasutasya vai / (B..K.)
 (ダルマの息子(ユディシュティラ)の祭式において，私はシシュパーラを殺すであろう。)

K. はこの後に更にもう 1 行挿入している。(=MBh.XII.847*)

duryodhanāparādhena yudhiṣṭhiraḥ /
 (ドゥルヨーダナの誤りと，ユディシュティラの徳性によって，)

¹⁴⁷K. はこの後に次の 1 行を挿入している。(=MBh.XII.848*)

yudhiṣṭhiraṃ sthāpayiṣye svarājye bhrātr̥bhiḥ saha /
 (余は，ユディシュティラを，弟たちと共に，自分の王国において(王に)指名するであろう。)

¹⁴⁸K. はこの後に次の 1 行を挿入している。(=MBh.XII.849*)

śastrair nipatitāḥ sarve nṛpā yāsyanti vai divam /
 (数々の武器に倒れた人々はすべて天界に赴くであろう。)

¹⁴⁹P. ātmajñātivinaśanam B. ātmajñānābhisamhitāḥ K. ātmajñānābhisamśrayaḥ

¹⁵⁰K. はこの後に，帰滅の経過を述べる 27 行 (K. vv.41cd-53) を挿入している。Cf.P. vol.16, Appendix I, No.31, pp.2104(left)-2105(left).

¹⁵¹caturmūrtidharo hy aham Cs. caturmūrtidharaḥ, balabhadraḥṣṇapradymnāniruddhamūrtidharaḥ / (caturmūrtidharaḥとは，バラバドラ，クリシュナ，ブラドユムナ，アニルツダの姿をもって，という意味である)

た¹⁵²数々の自分の世界に去るであろう。

- (94) ハンサ、馬頭は¹⁵³(余の)権化たち (prādurbhāvāḥ) である、最高のバラモンよ¹⁵⁴。ヴェーダの啓示が消滅した時には、余が復元した¹⁵⁵。かつてクリタ・ユガ期に、もろもろのヴェーダとともに、そし天啓聖典とともに作られ、
- (95) もろもろのプラーナにおいて、あるいは他のところで知られた権化たちが去り、そして余の多くのすぐれた権化たちも去った。それらの権化たちは、世界において為すべきことを数々為した後、再び、自らの根源 (svām prakṛtim) に去ったのである。
- (96) このようにブラフマー神によっても余を見ることには到達できない。汝は今ここで、専念する心によって (ekāntagatabuddhinā) そこに達したのである。
- (97) バラモンよ、このように信愛ある汝に、余はすべてを、過去と未来を秘密と共に、語ったのである、最高の善人よ。」
- (98) このように、一切の姿をもち、不変にして至尊の神は、これだけの言葉を語った後、そこで姿を隠した¹⁵⁶。
- (99) 一方、大きな力をもつナーラダは、望んだ恩寵を得た後、ナラとナーラーヤナに会うためにバダラの隠棲所へと急いだ¹⁵⁷。
- (100) 四種のヴェーダに一致し、サーンキヤとヨーガによって作られ、彼 (ナーラーヤナ?) によってパンチャラートラと呼ばれた¹⁵⁸この偉大な秘密の教えが¹⁵⁹、
- (101) ナーラーヤナの口から詠まれた¹⁶⁰。それをナーラダは、ブラフマー神の住居で、見た通り聞いた通りに再び語ったのである (aśrāvayat)。

ユディシュティラは言った。

- (102) この英知ある神の、このような稀有の偉大さを、何故ブラフマー神は知らず¹⁶¹、そのためナーラダから聞いたのですか。

¹⁵²brahmasatkṛtān Ganguli: and honoured by all the Brahmanas, p.139.20. Duessen: in meinen eigenen, von Brahman bereiteten Welten eingehen, —Haṅsa, p.779, v.103.

¹⁵³P. haṁso hayaśirāś ca B.,K.: haṁsaḥ kūrmaś ca matsyaś ca Ca. haṁsaḥ sāmkyācāryaḥ kapilaḥ / (haṁsaḥとは、サーンキヤの師カピラは、という意味である)

¹⁵⁴B.,K. はこの後に、次の2行を挿入している。(=MBh.XII.851*)

varāho naraśiṃhaś ca vāmano rāma eva ca / (猪、人獅子、小人、バラシュラーマ、)

rāmo dāśarathīś caiva sātvaṭaḥ kalkir eva ca / (十車王の子ラーマ、サートヴァタ王クリシュナ、カルキは、)

¹⁵⁵yadā vedaśrutir naṣṭā mayā pratyāhṛtā tadā Cf.Hopkins[Great Epic]: God created the Vedas, p.4.14ff.; yadā vedaśrutir naṣṭā, Dialectic Sanskrit, may be scribe's work, p.264, fn.1.

¹⁵⁶P. tatraivāntaradhīyata B.,K.: tatraivāntardhe punaḥ B.,K. はこの詩節の前に、bhīṣma uvāca を挿入している。

¹⁵⁷P. prādravad badarāśramam B.,K.: badaryāśarmam ādravat Cf.Matsubara[1994]: hermitage of Badarī, p.146, Reference No.36.

¹⁵⁸pañcarātrānuśabditaṁ Cf.Matsubara[1994]: Pañcarātra named after the sacrifice of Puruṣa-Nārāyaṇa, p.126.7.

¹⁵⁹mahopaniṣadaṁ Cs. mahopaniṣadaṁ, mahārahasyam / (mahopaniṣadam とは、大きな秘密を、という意味である) Cf.Hopkins[Great Epic]: mahopaniṣad, cannot be a work, p.10.17.

¹⁶⁰nārāyaṇamukhodgītaṁ Cf.Matsubara[1994]: Nārāyaṇa, the founder or the original teacher of Pañcarātra, pp.18.17, 128.29.

¹⁶¹P. kiṃ brahmaṇā na vijānīte B.,K.: kiṃ vai brahmā na jānīte

叙事詩の宗教哲学

(103) 至尊の祖父といえども、この神より低位なのですか。どうして彼は無量の光輝をもつ者(ナーラーヤナ)の威力を知らなかったのですか。

ビーシュマは言った。

(104) 幾千の大劫、幾百の大劫が過ぎ去り¹⁶²、そして何度となく創造と帰滅が過ぎ去ったのである、諸王の王よ。

(105) 創造の最初に、生き物を創造すると伝えられる威力あるブラフマー神は、(ナーラーヤナが)主たる神であるのを知っていた¹⁶³。そしてさらに、王よ、(ナーラーヤナが)最高のアートマンであり、支配者であり、そして自分の源 (prabhava) であることも知っていた。

(106) しかし、ブラフマー神の住処には、他にシッダの群が集まっていた。(ナーラダは)彼らにヴェーダに匹敵するその古譚を伝えたのである¹⁶⁴。

(107) 彼ら清浄な自己をもち自分に従う者たちから、太陽神スールヤが(古譚を)聞いて¹⁶⁵伝えたのである、バラモンよ、パーラタ族の者よ¹⁶⁶。

(108) 六万六千人の清浄な自己をもつ聖仙が、もろもろの世界を熱する太陽の従者として創造された。太陽は、清浄な自己をもつ彼らすべてに語ったのである。

(109) 太陽の従者であるかの偉大な聖仙たちによって、メール山に集まった神々は、この最高の教義を伝えられたのである、親愛なる者よ。

(110) そして、神々から再生族のアシタは聞いた。その後、そのすぐれた聖者は祖先たちに¹⁶⁷伝えたのである、諸王の王よ。

(111) そして私の父シャンタヌもまた私に語った。そして私もこのように聞いて、汝に語ったのである、パーラタ族の者よ。

(112) この古譚を聞いた神々、あるいは聖者たちは皆何度も、最高のアートマンを崇拜した。

(113) この継承されてきた神聖な物語を、汝は、ヴァースデーヴァを信仰しない者に¹⁶⁸決して伝えてはならない¹⁶⁹。

¹⁶²mahākālpasahasrāṇi mahākālpaśatāni ca Cf.Hopkins[1903]: Only the later epic knows the Mahā-kalpa by name, p.45.11., MBh.XII.323.1.

¹⁶³jānāti devapravaraṃ bhūyaś cāto 'dhikaṃ Cf.Hopkins[Great Epic]: in some the god Brahmān is below Vishnu, in others above him, p.183.23, fn.2.

¹⁶⁴tebhyas tat śrāvayāmāsa Ganguli: What Bhishma says is that it was not to Brahman, but to Siddhas assembled in Brahman's abode, that Nārada recited his narrative, p.141, fn.1.

¹⁶⁵P.,B.: teṣāṃ sakāśāt sūryaś ca śrutvā vai bhāvitātmanām K. aṣṭāviṃśatsahasrāṇi ṛṣīṇāṃ bhāvitātmanām

¹⁶⁶P. brahma śrāvayāmāsa bhārata B. rājan śrāvayāmāsa vai tataḥ K. brahmā śrāvayāmāsa tattvataḥ

¹⁶⁷P.,B.: pitṛṇāṃ K. pitṛn

¹⁶⁸nāvāsudevabhaktāya Cf.Matsubara[1994]: Pañcarātra doctrine, excluding *abhakta*, p.96.7.)

¹⁶⁹K. はこの詩節の後に次の3行を挿入している。(=MBh.XII.856*)

ākhyānam uttamaṃ cedaṃ śrāvayed yaḥ sadā nṛpa /

(この最上の物語を常に聞くならば、王よ、)

tadaiva manuḥ bhaktaḥ śucir bhūtvā samāhitaḥ /

(その信愛ある人は、清浄となって、心を集中するであろう。)

prāpnuyād acirād rājan viṣṇulokaṃ ca śāśvatam /

(そしてすぐに、王よ、永遠のヴィシュヌ世界に達するであろう。)

- (114) そして汝は私から他に何百ものダルマにかなった挿話 (upākhyāna) を聞いた。この物語はそれらから引き出された核心である。
- (115) 神々とアスラたちによって、(大海が) 攪拌されて、甘露が引き出されたように、かつて、バラモンたちによってこの甘露のごとき物語がこの世に引き出されたのである。
- (116) 専一の心に達し、専一に集中して、常にこの物語を詠む人、そして聞く人は、
- (117) 白い大きな島に達し、月の輝きをもつ者となって、千の光線をもつ神に至るであろう。このことに疑いはない。
- (118) この物語を最初から聞くならば、病む者は病気から解放されるであろう。知らんと欲する者は、もろもろの望んだものを得るであろう。信愛ある者は、信愛の道を行くであろう。
- (119) 王よ、汝もまた、常に最高のプルシャを崇拝すべきである。彼こそは、母であり、父であり、全世界の師である¹⁷⁰。
- (120) バラモンに好意ある永遠の至尊者、長い腕のジャーナルダナが、汝に対して好意的であらんことを、ユディシュティラよ、長い腕をもつ者よ。
- ヴァイシャンパーヤナは言った。
- (121) このすぐれた物語を聞いて、ジャーナメージャヤよ、ダルマの王 (ユディシュティラ) と、彼の兄弟はすべて、ナーラーヤナに専心した¹⁷¹。
- (122) そして、常に低誦に専心して、「この至尊なるプルシャは勝利せり」と言葉を発したのである¹⁷²、パーラタ族の者よ。
- (123) 我々のすぐれた師である聖者クリシュナ・ドヴァイパーヤナ (ヴィヤーサ) は、ナーラーヤナを讃えつつ、最高の低誦で唱えるべき祈りを詠った。
- (124) (ヴィヤーサは) 空から、常に甘露の住処である乳海に行き、神々の主を崇拝して、再び自分の隠棲所に戻った¹⁷³。

¹⁷⁰abhyarcyaḥ puruṣottamaḥ Cf.Matsubara[1994]: the personal character of the Supreme God, called *puruṣottama*, compared to parents, p.80.28.

¹⁷¹nārāyaṇaparābhavan Sandhi irregular: *nārāyaṇaparābhavan* Cf.Oberlies[Grammar]: 1.8. Double Sandhi, 1.8.7. *-ā- < /-ās a>/*, may be explained by assuming the verb forms to be augmentless imperfect or aorist form, p.45.26.

¹⁷²P.,B.: *sarasvatīm udīrayan* K. *sārasvatam udīrayan* *udīrayan* は、Augmentless imperfect か。 Cf.Oberlies[Grammar]: 6.4.1. Augmentless imperfect, p.178.9.

¹⁷³B.,K., はこの詩節の後に、ピーシュマの言葉 (=MBh.XII.859*), サウティの言葉 (=MBh.XII.860*) の 6 行を挿入している。

bhīṣma uvāca (859*) (ピーシュマは言った。)
 etat te sarvam ākhyātaṃ nāradoктаṃ mayeritam /
 (かくして、ナーラダが語ったすべてを、私は汝に伝えた。)
 pāraṃparāyāgatam hy etat pitrā me kathitam purā /
 (このように順次継承され、かつて父が私に語ったすべてを。)
 sautir uvāca / (860*) (サウティは言った。)
 etat te sarvam ākhyātaṃ vaiśaṃpāyanakīrtitam / (B.138cd)

(このようにヴァイシヤンパーヤナによって賞賛されたすべてはあなたに語られた。)
janamejayena yac chrutvā kṛtaṃ samyag yathāvidhi /
(ジャナメージャヤは、それを聞いて、規則に従って正しい形にした。)
yūyam hi taptatapaṣaḥ sarve ca caritavratāḥ / (B.139)
(苦行を実践し、誓約を実行するあなたがたすべては、)
sarve vedavido mukhyā naimiṣāraṇyavāsinaḥ /
(すなわち、あらゆるヴェーダを知り、ナイミシヤの森に住み、)
śaunakasya mahāsatraṃ prāptāḥ sarve dvijottamāḥ / (B.140)
(シャウナカの大ソーマ祭にやってきた、主だったすべてのすぐれたバラモンたちは、)
yajadhvaṃ suhutair yajñaiḥ śāśvataṃ parameśvaram / (B.141ab)
(正しく灯された祭火をもつもろもろの祭式によって、永遠の最高の自在者を祭るべし。)

(2018年 1月11日 受付)
(2018年 3月26日 受理)